

産 声

有 森 信 二

縁あつてこの星のこの地に生まれてきた
二十世紀半ばの春が間近な日の午後生まれる瞬間
慚愧に似た思いがちらと脳裏を過ぎつたものの
泣き叫んでいるうちに何を泣き叫んでいるのか
わからなくなつてしまった

この世に産声をあげるといふことは
ひどく大きな意味があるのだと知つていた筈である
のに

自分が派手な一声をあげた途端

この世のものたちの手にとり囲まれ

よつてたかつて

抱えてきた大切な性根を根っ子から抜き去られ

この世のものとしてしっかりと刻印されてしまった

長男だよ 母親似だよ
いや親父似かな 爺さんにも似てやしないか
立派な後継ぎができたよ でかしたでかした

この世に産声をあげるといふことは
非情な旅路の始まりの合図であつた筈で
あまりのことに

怖れをなしてあげた声だつたのだろう

この世に刻印され 認知され

この世の魂が吹き込まれてしまった途端

なにかもをいちどきに忘れてしまふ

という

仕組みだつたことまでは微かに覚えていたが

三声も泣けば

すっかり肉の肌馴染んでしまふということが先で

宗派がどうの

国籍がどうの

家柄がどうのなど

せせこましい決め事に採まれ繕られて

序列というものにうちのめされたり

金にかしずかされたり

段々畑を這いずりまわつたり

貧民窟に逃げ込んだり

爆弾を腰に巻き付け

砦を目掛けて突つ込んでいったりする

そんなことのためにこの世にやつてきたなんて

産声をあげたときにもう決まっていたんだつたか

決まっていなかったんだつたか

思い出せない

思い出せないように

仕組まれていたのだつたんだらうか

姉

姉がいたという

三日だけこの世の空気を吸い

三日だけさやさやと息を吐いた

色白の美人だったよ

と母がよく言っていたが

夭折した子に捧げるための おくりな
か

名もない

戸籍もない

墓もない

産道を懸命にくぐり出て

三日だけおおきな泣き声をあげ

シュウルルルウツと

風のまにまに飛んで 行ってしまった